

国際協力特別賞

「想像してみる第一歩」

大阪教育大学附属平野中学校 2年

平手 花菜

「想像してみてごらん。」

母は私にこう言った。

夏休み、私は『紛争地の看護師』という国境なき医師団の本を読んで読書感想文を書こうとしていた。下書きを終え、母に何気なく

「こんな感じで大丈夫だね。」

と原稿を渡した。

母は原稿の「戦争中の国の子供が学校に行けなくてかわいそう」という部分を読み、私に何でかわいそうだと思うかと尋ねた。私は

「行きたくても行けないから。」

と答えた。

すると、外国旅行に行きたいけど行けないという気持ちに似ているのか、と尋ねられる。

「少し違う。」

次に、手に入らない大好きな物が欲しい感じか、と尋ねられる。

「少し違う。」

そして、母は

「想像してみてごらん。」

と言った。

私はよく考えてみた。彼らの住む家や食べ物、目にしている風景を想像してみる。土や砂の匂い、銃声、泣き声。地雷を踏んでしまってなくなった手足、生きるか死ぬかという毎日の中で、学校に行きたいと思うこと。

私はこう感じる。大人が勝手にやっている戦争に巻き込まれたくない。どうしてこの国に生まれたのだろうか。生きるだけで精一杯で何も考えられない。それでも貧しさから抜け出すために勉強して、可能性をみつきたい。

これまでニュースやドキュメンタリー番組で戦時中の国や子供のことは何度も見聞きした。インターネットで詳細を検索したりもした。でも頭で知識として知っただけなのかもしれない。

私にはまだ国境の医師団のように、自分の命もかえりみず人の役に立ちたい、という程の強い信念はない。なさけないけれど、すごい人がいるなあという尊敬の念は持っても自分とは遠い存在に思える、高校の志望校を決めるのがやっとな人間だ。

こんな私が、よりよい世界の未来を目指して始める一歩は「想像してみる」ことだ。様々な問題についてよく知り、よく考えて想像し自分の事のように思う。自分にできることを考える。あたり前で今さらのような気がして恥ずかしいけれど、でもそれが初めの第一歩のような気がする。

私と戦時中の子供で何が違うのか考えた。何も変わらない。立場が反対でもおかしくなく、私はた

またま偶然日本の両親の元に生まれてきただけだ。そう思ったら戦時中の国は遠い国ではなく、彼らは遠い存在ではない「私」に感じられた。

今の私には想像することしかできないけれど一歩ずつ成長し、いつか自分の目で色々なものを見たい。まずは英語を真剣に学ぼう。